

常盤塾 モノ学の冒険  
生きているモノの宗教学  
～ アニミズムを開く愛・愛を身体化するモノ～  
(島蘭進)

2010年10月16日

松崎 努

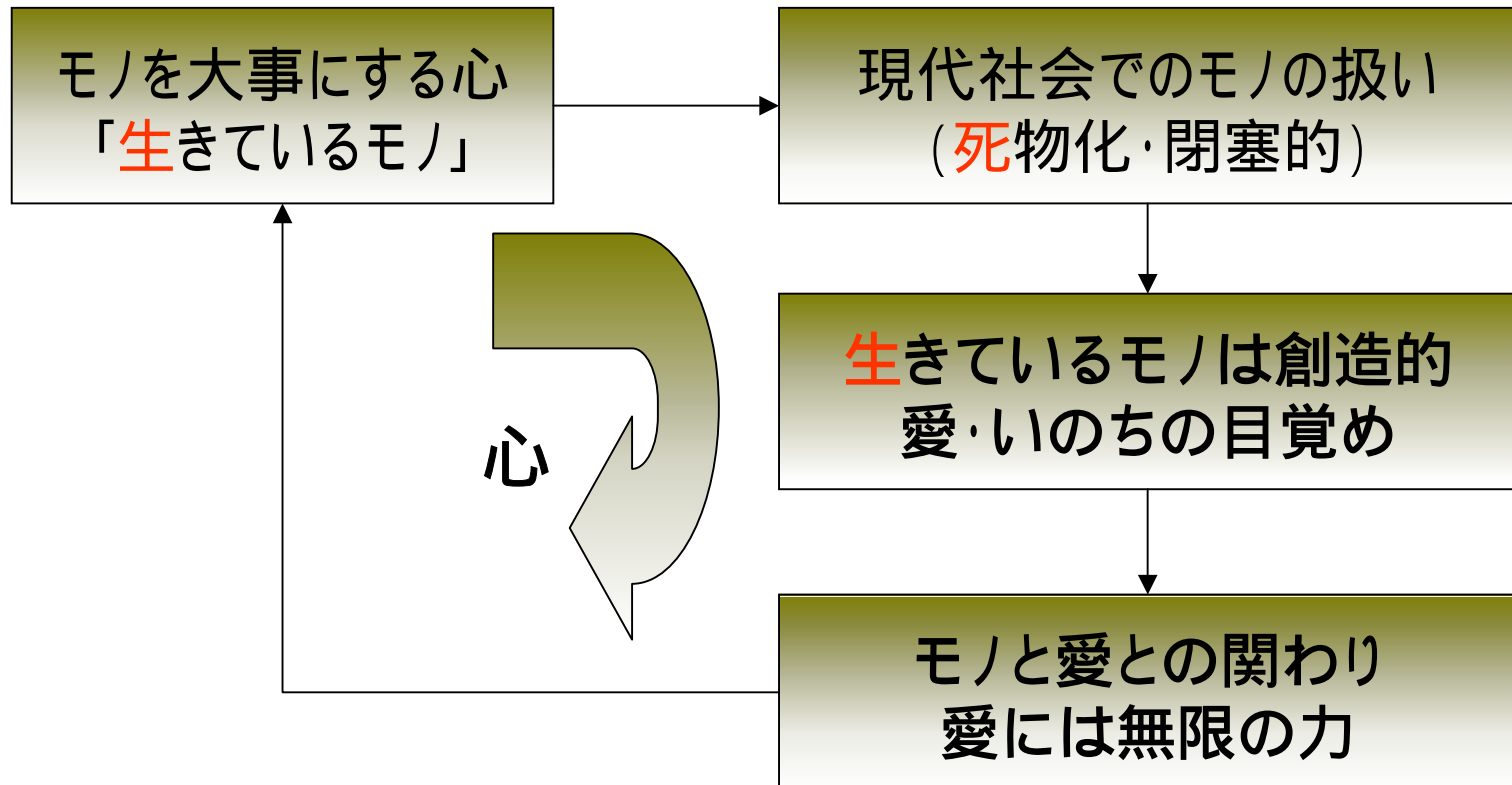
# アニミズム / 身体化

- エドワード・B・タイラーが原初文化の中で原始宗教の特徴を表すのに用いた用語
- 人間の宗教の基層には精霊が支配する不思議な世界がある
- 宗教の原初的形態を霊的存在への信仰に求め、アニミズムと名づけた
- 霊的存在とは、霊魂、死霊、精霊、霊鬼、神までを含む
- アニミズム的思考においては、人間は身体と霊魂からなると捉えられる
- 霊魂は自由に身体を出入りすることができ、夢をみているときや病気のときは霊魂が身体から離れた状態だとされる ゆえに分離した霊魂をとり戻すために儀式がもたれることがある
- 死とは霊魂が永遠に身体を離れ、宿るべき身体を失ってしまった状態

“生きている状態でこそ、身体化することができる”

# 本稿の主旨、全体ストーリー

キーコンセプト：**生と死**



## 課題 / 気づきのまとめ

1. 生きているモノを軽視すべきではない そこには深い宗教性の基盤をなすものが潜んでいる
2. 生きているモノを通して、病む心、病む社会の実態に迫ることも必要
3. 生きているモノを大切にするアニミズムの力を見据えつつ、その背後にどのような愛の形が見えるかを考える

### 自分ごとにする

- モノを大事にしなければならない
- モノを選ぶときには心を大事にしないといけない
- モノをつくる側も受け手のストーリーを大事にしないといけない  
(受け手のアクションを促す余白を残す)
- 「ありもの」の「使い回し」だけで未来の需要に備える能力を学びたい
- 精一杯、「生」きることで自分にアクセントをつける

# 1. 生きているモノの力

- 「モノを供養する」という習慣は日本のみ、墓や位牌、針など単なるモノが「聖なるもの」になる
- 「母校」は故郷の一部、聖なる空間
- 「宗教心」や「スピリチュアリティ」は、「モノを大事にする」こととつながっている
  
- 我々は自分の周りに「生きているモノ」の世界をつくり、それを尊ぶ文化がある
- アミニズムの現れ = 現代科学が心を持たぬ物質として捉えるものに、心やいのちを見出す感性

# 岩田慶治『木が人になり、人が木になる』1/2

(同名本)

## 自然を尊重する世界観 草木虫魚、森羅万象

- アニミズムの根本とは、木にも、石にも、虫にも、鳥にも、もともとカミが宿っていることを認め、そういうカミでいっぱい自然を尊重しながら生きること。
- 木は木として宇宙の主人公となり、山は山として主人公、ひとは誰も彼も一人ひとりが主人公になる。自分もまた、その仲間になって、風景が生き生きしてくる。これがアニミズムの本質。
- 「神は文化の中にあり、カミは野生と共にある。」

## 境界を超える

- 言葉によって築かれた壁などない。
- 現代科学の致命的な欠陥、それは、「なぜ」と問い、「なぜならバ」と答えることである。
- 言葉によって分類し、命名し、断片化し、バラバラにした上で、それぞれのピースを接着剤で張り合わせる。ジグソー・パズルのやりかたである。それでは人間はいつまでも宇宙という画面の外にいる。無限の木は育たない。
- 闇が切り捨てられるのだ。(バラム川上流部・ケンヤー族)

わからないことがない  
はずはない

# 岩田慶治『木が人になり、人が木になる』2/2

(同名本)

## 森の思想

- 「森には森の思想があって、四季の移り変わりとともに、華開落葉の循環を通じて、また生き物たちの行動によって、絶え間なく人間に語りかけている。森も草木も、言葉をしゃべるはずがないにもかかわらず、われわれは山や川や、森や木の言葉を聞きたいと思っている。」

人間中心主義 = 自然を征服し、制御し、改造して、人間中心のシステムをつくり上げた上、それを利用しつくす。

大橋先生の  
世界

- ボルネオの奥地に住むイバン族の文化 = 『音の文化』
- 精米の臼 = 台所道具 & 楽器      音      稲の魂 = 人間の魂
- 「人間が死ぬと、魂はからだを抜け出して山に登り、雲になる。雲はやがて稲の上に棚引き、そこで稲の魂になる。稲魂は刈り入れの後、屋根裏部屋に運ばれて大籠に収められる。  
モミが精米され、炊かれて人間の口に入る。そこで稲魂が人間の魂に戻る。この循環の世界を支えているのが音。」

# クロード・レヴィ・ストロース「ブリコロール(野性の思考)」

(内田樹『日本辺境論』)

- ブリコロール = 「ありあわせのもの」しかない、限定された資源のうちで生活している野性の人々
- 野生の人々には固有の知がある。それはあらかじめ立てられた計画に基づいて必要な道具や素材をテキパキと集める能力ではない。「ありもの」の「使い回し」だけで未来の需要に備える能力である。
- 有用性がわからないものについて、その有用性や意義を先駆的に知る能力 = 学ぶ力
- 学ぶ力、先駆的に知る力こそが日本最大の国力。すなわち自分にとってそれ死活的に重要であることをいかなる論拠によっても証明出来ないにも関わらず確信できる力のこと。 **劣化**



# ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』

- 言葉を視覚的に理解するか、聴覚的に理解するか
- 声は宗教的な性格を帯びやすいメディア、音声は調和した世界を感じさせる世界があるという点で宗教的なポテンシャルをもっている
- (蛇足) 宗教と音楽  
教会 スピリチュアル(黒人霊歌) ゴスペル R & B  
ソウル ブラックミュージック ヒップホップ

文明人	<u>文字の文化</u>	<u>言葉は記号、制御できる物質的な実在</u> <u>言葉を何よりも視覚を通して理解する</u>
非文明人	<u>声(音)の文化</u>	<u>「声は内部からやってくる(聴覚には「内部性」がある)」</u> <u>「音を聞くときには自らが中心になる」</u>

元気の源  
= 主観

# ルリアの実験

- 「まさかり・斧・鎌」 「鋸・小麦の穂・丸太」の関連を見つけ出すウズベキスタンの実験
- 現代文明人は鋸だが、未開人は小麦や丸太を選ぶ
- 客観化して分類整理するのではなく、それらのモノを使って、身体に組み込んで何をしようかを考える
- 「声の文化」では人は生きているモノに囲まれて生きている

活字	物を生きているモノとして考える感じ方を抑圧する傾向
音(声)	生きているモノを生きているモノとして受け取ろうとする傾向

# マーシャル・マクルーハン「メディア論」

- **文字・活字中心の文化普及。**グーテンベルクによる活版印刷が知識とすべきものを規定したという事実が、彼の技術観の礎。
- 印刷された本が教授法と表現法だけでなく教授内容まで変え、結果として近代大学を誕生させた。
- **「人間は自覚することなく自身の生み出したメディアによって変えられてしまう」。**

- **ホットなメディアとクールなメディア**

印刷は人間を視覚の人、電子メディアは全感覚の人に。

電子メディアの時代、『音の文化』に還りつつある？

ホット	高精細度(メディア)	低参与(受け手)	ラジオ、映画、写真
クール	低精細度(メディア)	<b>高参与(受け手)</b>	電話、テレビ、漫画

## 2. 「死物化」と「モノの閉塞」

- 現代社会で生きているモノの扱いについて考える
- 『臓器売買』
- 「臓器はその人の所有物である(物 = 物質としての物)」
- 近代文化や科学・学問にあえて、「生きているモノ」を「死んだ物」とする特徴がある
- 「生きているモノ」が「閉塞的」になっている
- ひきこもりは、生きているモノ(プラモデル)にひどく執着、世界と心の交流をすることで安心感を得る
- 生きているモノの排除が進んでいると同時に、生きているモノへの病理的な執着という現象もある(モノには執着するが、モノの向こうへはいけない)

# 大平健『豊かさの精神病理』(文芸春秋)

- 幸福になる為の2種類の道筋。

	人生の箇所にアクセントをつけて、満足できる人生を手に入れる
	自分にアクセントをつけて、人生に満足できる自分になる

- 生きているモノへの病理的な執着  
=モノ語りの人々

90年代前半の日本は の幸福にまい進した時代。  
金、地位、学歴、持ち物などに幸福を求めていたが、それらはいずれも上には上があるようなもので、その追求も際限がなかった。自分も一種のモノのように扱った。  
人も上には上があることになり上に対しては嫉妬、下に対しては蔑視するばかりで、自分は自分と心得て の幸福を求めることは難しかった。

## 『故郷喪失』と宗教運動

- 現代人の孤独な生活のあり方、母的なものの喪失、乖離ということが関わっている
- 天理教のおぢばがえり(本部神殿の参拝) = 失われていくふるさと(親なる神)への帰還
- 失われたふるさとを復興する運動(宗教心)  
現代科学が心を持たぬ物質として捉えるものに、心やいのちを見出す感性

## スティーブン・スピルバーグの『A・I』

- 主人公デビッド 冷凍された難病の子供の代わりの人間型ロボット
- 子供の病気が治ると、デビッドは母親に道端に置き去りにされ、捨てられてしまう
- デビッドはテディベアを抱いている
- 「生きているモノ」で最も大事なモノ = 母親の代わり、『対象維持機能』の役割
- 本来は母親のいるところで感じられる**絶対的安心感**というものを、母親から離れたところでも感じられるために生きているモノが必要となる
- テディベアというぬいぐるみを通じた感情的交流
- (結末) 200年後、母親の髪の毛を持っていたことで、死んだ母親が生き返り安心して一体になる
- 一方、母親離れをうまくやるという課題も

# 3.モノの彼方に見える光明

- 現代の子供や若者の心象風景  
何か「見捨てられた」気持ち  
自分が誰かに必要とされている存在と感ずることができない  
孤独感

- 死(イノセントワールド「魂を送る儀式」)  
家族というものがない世界、家族が抑圧でしかない世界  
圧倒的に利己主義で、そんな人々だけが生きている世界
- 生(どんぐりの家「石ころ」)  
道端の石ころは、生きているモノとして大切にずる感ず

- 生きているモノは、創造的に生きている、実は「愛」そのもの
- 「愛」を体現した「モノ」、いのちの目覚め



## 福島慶道「いま、ここを、無心に生きる」(同名本)

- 禅は無を説く宗教です。

人間にはエゴがいっぱいあります。仏教的には我といいますが、その我を切っていくことが無になる体験です。自分の我をどんどん切っていくと、自分の心の深いところから、自然と周りのことを心配せずにおれないという気分が湧いてきます。これが慈悲の心です。

- 禅という宗教は、「いま、ここ、この私」が、どう生きるかということ  
を教えます。それはどこまでも生の世界の問題です。

禅は無心に生きなさいと教えます。空っぽの自分で生きなさい。無心の自分で生きなさいと教えます。死のことを忘れて、今日を精一杯、明日を精一杯生きなさいということです。

無心で生きた者が、ある日ある形で無心に死んでいけるということです。こういう生き方を禅は「無生死」といいます。

- 仏教には人間は死んだらみんな極楽浄土に往生するという信仰があります。それは死仏です。禅は、もっと現実的に見よということを強調します。

# 新しい価値観をもつ若者たち

## 社会背景

- モノがあふれるデフレ社会
- 何かを手に入れたいという欲求が希薄
- 「たくさん消費すること = 幸せな人生」は旧文脈に
- 個人が価格を決める時代へ

## 若者の思考

- 憧れから共感へ(売り手の哲学重視)
- 自分の尺度を過度に他者に押し付けない
- つくりこみからさりげなさへ、ほどほど

## 心の快適

- 自分にとってよいものを手に入れる
- くつろげる場所や時間を手に入れること      ながら行動
- 「他者に喜びを与えること」 会社のためから社会のためへ
- よい人間関係を築くこと 仲間がいればよい(人とつながりたい)

堅実(エコ)  
淡々  
やさしい  
By サントリー

新しい幸福

自分にアクセントを  
つける

# 岸勇希 コミュニケーションデザイン進化論

(宣伝会議プロモーション&メディアフォーラム2011)

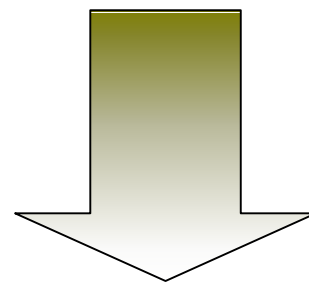
- 言語化(市場をつくり出す力)の主体の変遷

80年代広告 90年代雑誌      アマゾン レコメンドエンジン  
自分に合ったものを送ってくれる      閉じていく世界

クチコミっていうが...

集合知でしか評価できなくなっている

客観知と主観知の組み合わせができない



- MIT 「ノイズデザイン」の研究

再び開かせる

完全検索できるものの周辺にこそ面白さがある  
ツイッターは知らないことを知らせてくれるメディア

余白  
のりしろ

# 4. モノと愛の関わり

- 「愛」というものには無限の力がある
- 人間として互いに受け容れあっていることからくる根本的な安心感がある
- 生きているモノへの親しみは人類の精神文化の根底にある、  
日本文化にはなじみ深く、西洋文化では軽んじてきた
- 生きているモノは「愛」、とりわけ母の愛、親の愛と深い関わり  
がある
- 人間を育ててくれた原初的信頼関係が背後にある(宗教は安らぎの世界を確保する文化装置)  
    ウィニコット『対象関係性』、エリクソン『基本的信頼』